

●主題

実社会と関わり合いながら探究し、「実現したい未来」を創造する生徒の育成

●団体名

群馬大学共同教育学部附属中学校総合部

I はじめに

今日の前にいる中学生が成人し社会に出る頃、つまり 2030 年代の未来には、より VUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代になると言われている。その中には、これまでの傾向からある程度は正しいだろうと予測される変化が存在し、移民や自然災害の増加といった社会の変化や、AI の発達やオートメーション化による経済面の変化、家族形態や健康状態などの個人レベルでの変化がその一例である。「メガ・トレンド」と呼ばれるこれらの傾向を前提に進められてきた OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトでは、「OECD ラーニング・コンパス 2030」という名称のレポートを発表している。日本と OECD との二国間プロジェクトとも大きく関わるこのラーニング・コンパスでは、ウェルビーイング、3 つの変革をもたらすコンピテンシー、AAR サイクル、エージェンシーといった、これからの教育において大切になる、学習の本源的価値が示されている。

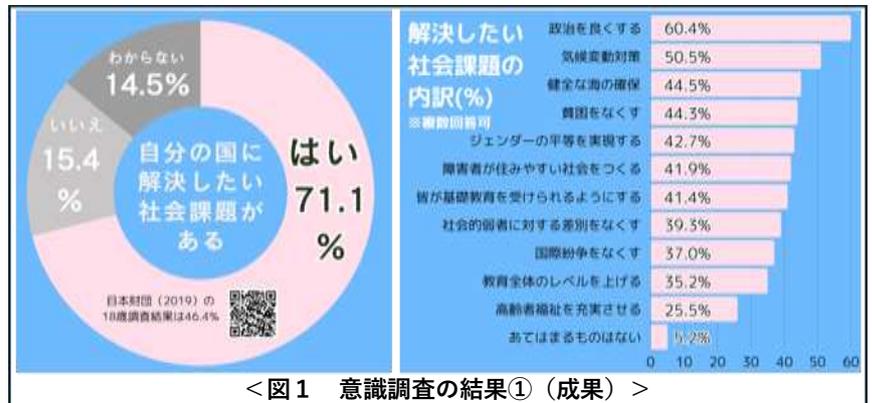
令和 5 年 6 月に文科省より示された「教育振興基本計画」では、予測困難な時代における教育の方向性として、2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成や、日本社会に根差したウェルビーイングの向上をコンセプトにした、今後 5 年間の教育政策の目標と基本施策が示されている。その中には、ラーニング・コンパスで示された 3 つの変革をもたらすコンピテンシーともつながる、イノベーションを担う人材育成や、エージェンシーともつながる、主体的に社会の形成に参画する態度の育成なども挙げられており、日本の教育の方向性と OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトとの親和性の高さがうかがえるものとなっている。これらのつながりは、群馬県教育ビジョン(群馬県第 4 期教育振興基本計画：令和 6 年 4 月)にも表れており、最上位目標には「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて 一ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成」が設定されている。

これらの状況を踏まえ、本校生徒に対して、OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトの方針に沿った意識調査（令和 6 年 1 月実施）を行った。

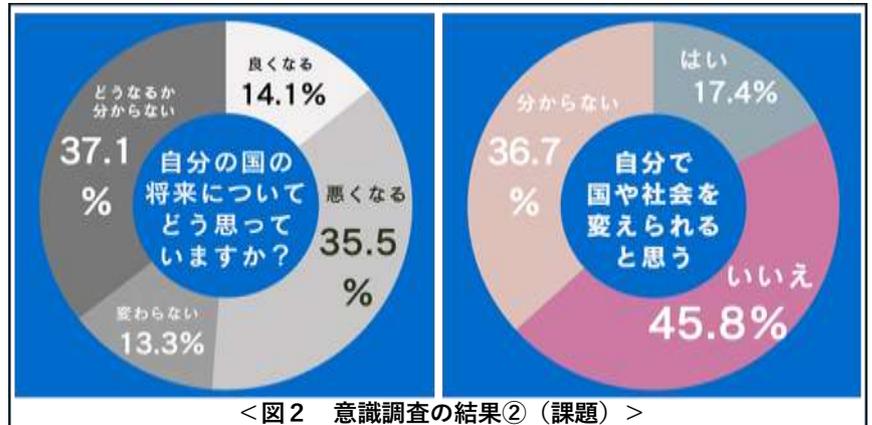
自分の国に解決したい社会課題があると考えている生徒は 71.1%であり、これは 2019 年の 18 歳意識調査（日本財団）の日本人の結果 46.4%を大きく上回っている（図 1）。また、解決したい社会課題の内訳を見ると、政治をよくする、気候変動対策、健全な海の確保など多岐にわたり、令和 4 年度から総合的な学習の時間を「未来創造科」として改編して、現代的な諸課題の解決に向けた探究的な学びを通して、これらの課題解決に対する理解や解決意欲などが育成された結果と考える。

一方、日本の将来がよくなると考えている生徒は 14.1%、自分で国や社会を変えられると思っている生徒は 17.4%と少なく、将来に対しての自己効力感の低さが読み取れる（図 2）。また、学校や家庭、塾などの学びが、自分の将来の生活の質の向上につながると考えて学習している生徒は全体の約 80%である一方、日本や世界の将来の改善につながると考えている生徒は、自分自身との関わりが遠くなるほど少なくなっていることがわかった（図 3）。「自分で国や社会を変えられる」「日本の将来がよくなる」と考える生徒や、「学校や家庭、塾などの学びが日本や世界の将来につながる」という意識の向上は、国や将来に対する自己効力感や目的意識を高め、「何のために学ぶのか」「この学習にどんな意味があるのか」など、自身の学びに対して責任をもって取り組む学習者の育成につながると考える。

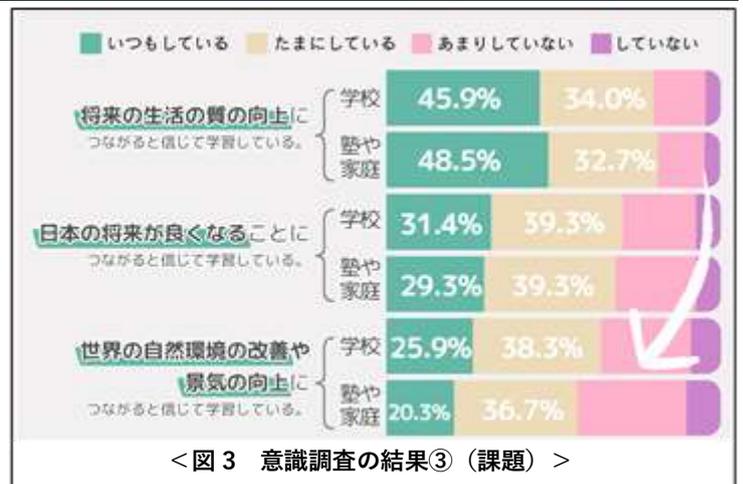
以上の今求められている教育や本校生徒の意識調査などから、「未来を創る」担い手となるためには、自分の将



<図 1 意識調査の結果①（成果）>



<図 2 意識調査の結果②（課題）>



<図 3 意識調査の結果③（課題）>

来や日本・世界において実現したい未来と自身の学習との関係性を十分理解し、自身の学びに対して責任をもって取り組めるようになる必要があると考える。また、答えのない課題も自分事として挑戦し続けられるようになることも大切だと考える。実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することによって、生徒が自身の学習の重要性や価値に気づき、日本や世界の将来に対して能動的に、自ら実現したい未来を創造していこうとする責任あるエージェントになれるだろう。

そこで、未来創造科を通して、生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインする実践をしていくことが有効だと仮定し、研究を進めることとした。

II 研究のねらい

中学生が現代的な諸課題を自分事化して探究に取り組む中で、社会と関わり合える手立てを講じることが生徒のエージェンシーの高まりや資質・能力の育成にどのような影響を与えるかを実践的に明らかにする。

III 主題設定の理由

本校では、総合的な学習の時間を未来創造科として改編して学習を進めている。各学年の単元を、第1学年「群馬を知る」、第2学年「日本を探る」、第3学年「未来を創る」と設定し、第1学年と第2学年では、群馬や日本を対象に探究を行い、第3学年では、探究の対象を限定せず、これまでの探究を踏まえて、探究の方向性や「実現したい未来」の創造に向けたテーマを個々で設定できるようにしている。また、各学年で小単元①「過去を知る」、小単元②「現在を変える」、小単元③「未来に向かう」（第3学年は「未来を創る、未来へつなぐ」）としている（図4）。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
未来創造科第3学年	小単元①「過去を知る」、②「現在を変える」、③「未来を創る」「未来へつなぐ」											
	①過去を知る		②現在を変える			③未来を創る			③未来へつなぐ			
	現代の課題には、どんな原因があり、どんな取組がされているのだろうか。	異学年交流	現在をよりよくするために、私たちには何ができるだろうか。 *課題の設定から情報の収集まで	中間検討会	夏休みの実践	整理・分析	夏休み実践の	夢や希望溢れる未来を創るために、どんな提案ができるだろうか。	未来創造科シンポジウム	卒業論文制作		

<図4 未来創造科 第3学年の年間予定>

昨年度は、現代的な諸課題の解決と「自己の生き方」を踏まえた目的意識のある探究を、「未来創造科クロスMAP」を活用して各教科等と関連付けたり、学びを振り返ったりしながら行うことで、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成できると考え実践を行った。教科等横断的な視点に立った資質・能力は学習指導要領総則にて、以下のように大別されている。

1. 教科の枠組みを踏まえた資質・能力
2. 学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力）
3. 現代的な諸課題に対応する資質・能力

成果として、「未来創造科クロスMAP」を活用しながら道徳科での学びを振り返ることで、未来創造科が各教科等の学習を通して培った多くの資質・能力を発揮する場となり、「実現したい未来」に向けて「自己の生き方」を踏まえた目的意識のある探究が実現された。しかし、令和6年度に行ったアンケートでは「自分で国や社会を変えられると思いますか。」について「はい」と回答した生徒が約20%と少なく、自分の提案で国や社会に影響を与えることができるということを実感できていないことが課題となった。

未来創造科を通して、自分の提案で国や社会に影響を与えることができることを実感できていないことの原因は、社会とつながりをもちながら、外部人材をはじめとした多様な他者と協働して探究を進めることが十分にできていないからと考える。また、未来創造科の探究の対象としている現代的な諸課題を深く理解することで、社会で起こっている現代的な諸課題をより自分事化することができ、課題意識をもちながら探究をすすめることができると考えた。社会とつながりをもちながら現代的な諸課題を深く理解するためには、多様な他者から得られた探究に対してのフィードバックを聴き、社会とつながる必要がある。

以上のことから、今年度は研究主題を「社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

IV 本研究における具体的な手立て

生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインする「未来創造科」の具体的な手立ては以下のとおりである。

	生徒がエージェンシーを発揮し、 探究的な学びをデザインする「未来創造科」の具体的な手立て
未来創造科	1 社会とのつながりの中で探究をする地域ネットワークの活用 2 生徒が自らの探究的な学びをデザインする「未来創造 Day」 3 生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

1 社会とのつながりの中で探究をする地域ネットワークの活用

未来創造科では、身に付けていきたい力として3つの力「学びを統合し、現在を見つめる力」「探究し続け、未来を問う力」「自己を見つめ、未来を切り拓く力」を設定している。特に、「探究し続け、未来を問う力」を身に付けていくためには、地域の人々をはじめとした多くの人々との協力が必要である。地域に関わる人の実際に触れることで得られる新たな気付きから探究を始めていくことが、自分自身で問いをもち探究し続けることにつながると考えられる。そこで、「課題の設定」の際に1年生では「公民館」、2年生では「市役所」や「県庁」、3年生では「群馬大学」と連携し、講話を聞き、自分の興味のあることや疑問に思っていることを質問することで、実際の社会での出来事や問題を自分事として受け止めながら、「探究し続け、未来を問う力」を高めていく(図5)。



<図5 未来創造科ネットワークモデル>

社会との関わりの中で探究することは、「自分で行動に移すこと」にもつながる。加藤(2023)は、「総合的な学習の時間で様々な勤労者との関わりを通して感じ取る勤労者の喜びや苦勞、町づくりや地域活性化に取り組む人々と協働して得られる充実感や達成感などは、単なる感情ではなく、極めて知的な理解を含んだ情動と解釈することができる。」と述べている。また、生涯を通じた学習において、全米科学・工学・医学アカデミーは、フォーマルな学校教育の外側にある家族やコミュニティといった文脈の中で人々が育む豊かな知識や能力の重要性を改めて述べており、学校教育の外側にあるコミュニティこそ豊かな資質・能力を育む上で重要であると考えられる。そのため、自身の探究のテーマや興味・関心に照らし合わせ、社会とつながりながら探究を進めることで、現代的な諸課題の解決に向けての資質・能力を高めることにつながると考える。

2 生徒が自らの探究的な学びをデザインする「未来創造 Day」

未来創造科の探究を行う「未来創造 Day」を設定し、自らの探究をデザインしながら、探究を深められるようにしていく(図6)。探究をスタートする際の課題設定の場面で「未来創造 Day①」を行い、未来創造科ガイダンスを基にしながら、先行研究や社会の様々な取組を調べたり、実際に現代的な諸課題の解決に向けて取り組んでいる企業や団体にインタビューをしたりして、現代的な諸課題についての理解を深めていく。「未来創造 Day②」では、各学年の単元に応じて、外部の「ヒト・コト・モノ」に触れ、社会とつながりながら自身の探究テーマを設定していく。また、社会を変えられると考える生徒を増やしていくためには、自分で実現したい未来に向けて、行動を起こす経験が必要であると考えた。そこで、情報の収集や提案の計画を立案する際に、「未来創造 Day③」を位置付けた。「未来創造 Day③」では、半日の時間を設け、実現したい未来と今の自分の探究とのギャップを見つめ直す時間とし、自分の探究の方向目標を決めた。それを意識しながら、「未来創造 Day③」に臨むことで、生徒は「この半日の時間をどう使うか」「何から始めて、どこまで進めるか」などを自分で決める必要が出てくる。さらに、1時間単位では、探究のサイクルが分断されがちだが、まとまった時間を設けることで、探究のサイクルをつな



<図6 未来創造 Day について>

1時間単位では、探究のサイクルが分断されがちだが、まとまった時間を設けることで、探究のサイクルをつな

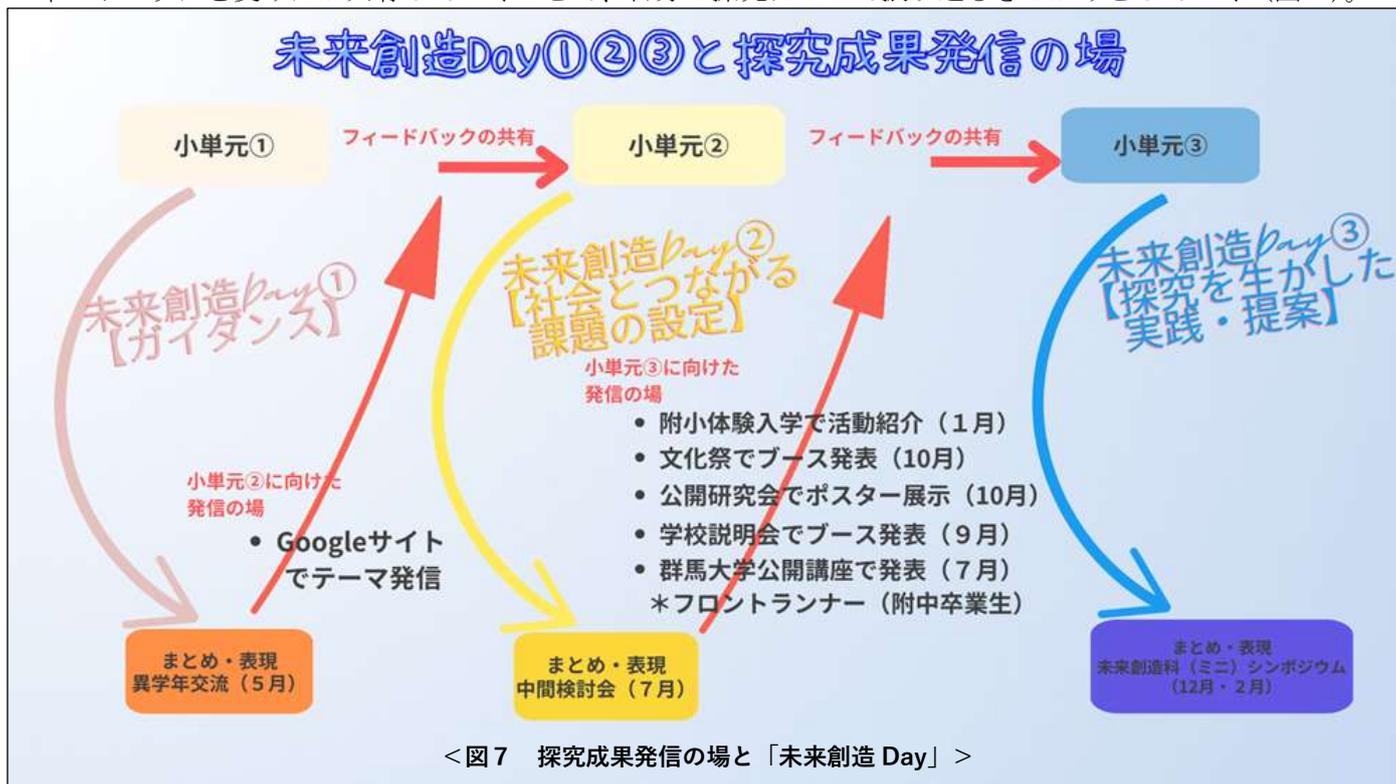
げて経験することができ、よりよい探究をデザインしていくための計画・構想力の向上につながると考え、何をすべきかを計画を立てる企画書を作成し、見直しをもちながら、自らの探究をデザインするようにした。探究に対して自分で「やってみたい」と思ったことを行動に移したり、計画・立案したことを実践したり、これまでの探究を振り返り、実現したい未来に向けて、自分には何が必要かを検討したりすることをそれぞれが選択しながら行動に移す経験をしていくことで、「自分でもできる」とモチベーションを高め、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究を行うことができるようにする。「未来創造 Day③」を実践していくことで、「探究し続け、未来を問う力」の向上につながると考える。これらの「未来創造 Day」の取組から得られたフィードバックについても、個人のみならず講座内で共有することを探究の過程に位置付ける。対象への関わりを増やしながらかつ々のテーマに粘り強く取り組むことで、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力をより向上していくことにもつながることができると思う。

3 生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

昨年度は、未来創造科の探究の成果を、12月に行っている「未来創造科シンポジウム」（3年生）や2月に行っている「未来創造科ミニシンポジウム」（1・2年生）を中心として発信してきた。

今年度は、年間を通じて校外の外部人材や教員といった多様な他者にも探究の成果を発信していくことで、得られたフィードバックを基に自分自身で探究の成果や課題をより明確なものとしながら、学びを深め、次の探究につなげていくことができると考えた。未来創造科では、自分の探究したいことに合わせて領域を選択し、①環境、防災、エネルギー、②経済、社会、情報、③健康、福祉、④伝統・文化、教育の4つのうちいずれかの講座に所属する。「課題の設定」や「情報の収集」の際に得られた成果を講座内で共有できるようにすることで、探究を通して自分自身の「実現したい未来」を創造していく意欲を高め、未来創造科でエージェンシーを発揮していく。

具体的には、自身のプレゼンテーションを作成し、考えを伝えるだけでなく、他者が探究に対してどのようなフィードバックを受けたか共有していくことで、自身の探究について振り返るきっかけとしていく（図7）。



探究成果発信の場を充実させながら、得られたフィードバックを個人のみならず講座内で共有することを探究の過程に位置付け、外部とのつながりをより一層意識できるようにし、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究を行うことができるようにする。

探究成果発信の場の一つである群馬大学との連携では、本校の卒業生を、未来創造科の探究を生かしながら高校でどのような探究につなげているかフロントランナーとして発表してもらい、卒業生の発表を聞き、それを生徒たちと共有し、探究のゴールを高等学校よりも更に先の未来へと意識付けることができるようにすることで、「実現したい未来を創りたい」という希望をもつことができるようにする。また、「学校説明会」や「文化祭」をはじめとした学校行事では、来校者のいる場面で探究について発信していくことで、よりよい提案に改善していきながら、「実現したい未来」に対して探究する意欲を高めることができるようにする。

ついて探究をしている生徒は、サイクルツーリズムの提案を考えていたが、群馬大学の先生から「自動運転」、「スローモビリティ」についての講義を受け、それらを提案に加えられないかと探究をしていた。

「未来創造 Day③」では、生徒は、実際に行う前に、企画書を作成したが、その企画書を練っていく中で、実現したい未来に向けて、改めて、「なぜこのテーマで探究をしているのか」「何のためにこの提案を考えたのか」など、探究の目的を振り返るきっかけとなり、実現したい未来を実現していくために自分に必要なことは何かを考え直す時間となった（図 10）。目的意識をもちながら「未来創造 Day③」に向けて何を行うかを考えていくことで、「未来創造 Day③」が終わった後、何をするかまで見通しをもつことができるようになっていた。まとまった時間の中で、探究のサイクルをつなげて経験することで、よりよい探究をデザインしていくための計画・構想力の向上につながった。実際の「未来創造 Day③」では、様々な商店街を比較し、前橋のよさや前橋がよりよくなるための提案を考えるために商店街に行き、街頭インタビューを行ったり、自らが考えた再生エネルギーを広めていくための提案を専門家にみていただき、アドバイスをもらったりする活動が見られた。また、実際に校外に出なかった生徒もオンラインを用いてインタビューを実施したり、校内で異学年での交流を通して探究のすすめ方について意見交換をしたり、これまで集めた情報を整理したりする姿が見られた（図 11）。



校外で探究している様子



校内で異学年交流している様子



オンラインでインタビューしている様子



実験している様子

< 図 11 未来創造 Day③の様子 >

生徒の振り返りからは、専門家や企業の方と実際に話をすることで、自分の提案の不十分なところや改善すべきことが明確になり、今後の見通しを立てることができた記述や再度提案を考えた際に改めて話を聞いてもらえるよう依頼している記述が見られた。このような記述から、課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のサイクルを経験し、それを見直し、デザインし、探究を推し進めていく力の向上が見られたと考える。また、計画していたことが思うように進まなかった、自分の仮説が間違っていたなどの記述も見られた。こうした経験から、限られた時間の中で、どのように時間を使っていくことで、よりよく課題を解決していくことができるか、計画を立てる際に気を付けることなどを肌で感じ、よりよい探究に向けての計画・構想力の向上につながったと考える。

さらに、「こういう実践ができたらいいなと思っていたことに実際に取り組むことができてよかった」や「計画を立てたり、企業に連絡したりする準備の中で、探究を見つめ直す機会になったし、実際に企業に訪問してみて、いろいろ話を聞くことができたことで、自分の探究の目指すべき方向がより具体的になってよかった」、「探究を続けていく中で、集めた情報の整理・分析をどのようにすればよいのか悩んでいたけど、先輩にいろいろとアドバイスをもらうことができてよかった。今後に活かしていきたい」などのような感想もあった。自分には何が必要かを検討し、それぞれが選択しながら行動に移す経験をしていくことで、「自分でもできる」とモチベーションを高め、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究を行っている姿が見られた。「未来創造 Day③」を実践していくことで、社会とつながりながら探究し続け、未来を問う力の向上につながったと考える (図 12)。

振り返り (未来創造Day③の学びを今後の探究にどう生かすか)
 実際にオンラインで大学の先生にインタビューをすることができてよかった。今の提案では、まだ客観的なデータがないため根拠が弱かったり、誰への提案をなのかがはっきりしていなかったりするという専門家からのアドバイスを受けて、自分の提案の改善点を知ることができた。今後も協力をしてくださるとお話をいただいたので、提案を形にして、もう一度プレゼンしたいと思った。

振り返り (未来創造Day③の学びを今後の探究にどう生かすか)
 今日は道の駅まほしあさんで「車中泊スポット」の提案をしました。結果は、やるのは法的的に難しいと言われてしまいましたが、提案の仕方や付加価値をつけるために考えた朝市開催はできそうでした。なので朝市の開催に向けて目的を明確にしたり、モデルを考える方向で作業を進めていきます。

振り返り (未来創造Day③の学びを今後の探究にどう生かすか)
 今日は体験会を学校で開くために校長先生に相談を行いました。一年生の探究からスライドをまとめてなぜ体験会を開きたいのか、下書きの見直しをプレゼンし、話を聞いてもらい、体験会開催前にやる方がいいと、細かい予定をつめるためにアドバイスをたくさんいただきました。準備は時間がかかりそうなので、やるべきことの整理の予定を立て、また改めて提案に行こうと思います。

振り返り (未来創造Day③の学びを今後の探究にどう生かすか)
 今回は白井屋ホテルで普通じゃできないような、貴重な体験をさせていただいた。白井屋ホテルのモチーフやお客さんを増やすためにしていることなどを聞くことができた。また僕の探究とは異なる内容である、商店街のことなども説明していただいて、自分の探究内容と関わる部分があるのではないかと考えた。これからの探究に存分に活かせるようにしたい。

< 図 12 ワークシートの記述 >

3 生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

成果として、発信の場を充実させることで、多くのフィードバックを受けることができ、自身の探究を振り返り、修正し、実現したい未来へと進んでいくことができた。フィードバックの中には、生徒が考えた提案への称賛もあれば、新たな視点や改善点についての指摘もあった。称賛されることで、自分の探究に自信をもつことができ、「実現したい未来を創りたい」という思いや行動につながった。また、群馬県を地震に強い県にしたいと考えていたグループがあったが、自身の探究で得た提案をしてみたところ、「なぜ地震に強い県にしたいのか」「長年群馬に住んでいるが、地震よりも雹や洪水の方が怖い」「群馬県は農業がさかんだから、雹や洪水が起ると、かなり影響を受けるんだよ」など、課題の設定理由の根拠や相手意識など、新たな視点や改善点の指摘は、生徒



< 図 13 地域で発表している様子 >

同士だけの意見交換では得られなかった様々な視点や立場からの意見となり、探究成果としての提案が多面的・多角的に考えられたものになった。提案をより説得力のあるものにつなげた(図13)。また、自分が得たフィードバックやそこから学んだことを共有する時間を設けることで、一人や1グループの学びが個人に留まらず、領域内、講座内へと広げることができた。発信の場を多く設け、多様な他者につながりながら探究を進めることは、生徒が外部とつながろうとする意識を向上させ、一人ではできないことも多様な他者と協働しながら実現したい未来に探究を進めることにつながった。これは現代的な諸課題に対応する資質・能力の向上につながったと考えられる。

さらに、フロントランナーによる発表を見ることで、今、行っている探究がこれからの自分の人生にどうつながっていくのかのイメージをもつことができたと考える(図14)。



<図14 フロントランナーの発表の様子>

VI 研究のまとめ

これらを通して、令和7年度に行ったアンケートでは「自分で国や社会を変えられると思いますか。」について、約30%の生徒が「はい」と回答し、増加が見られた。これは、企業や公民館など、生徒が社会とつながりながら探究していることを自覚できたことで、自分の提案が国や社会に影響を与えることができる、現代的な諸課題に対して自分が何か行動していくことは決して無意味ではないと感じる生徒が増加したと考えられる。現代的な諸課題をより自分事化し、それを解決するために社会とつながり、各教科等の学びも活用しながら探究を進める姿が見られた。その中で、生徒が身に付けた資質・能力は、社会に出たときに立ちほだかるであろう様々な現代的な諸課題に対して、自ら解決策を考え、実行し、振り返りながら、よりよい社会や幸福な人生に向けて歩みを進めていく力になると考えている。

課題として、未来創造 Day③において、半日の時間を有意義に活用できない生徒がいたことが挙げられる。企画書の制作に時間がかかり、十分に計画を練れなかったことや「過去を知る」小単元①の探究が不十分であり、解決したい現代的な諸課題が明確になっていなかったことが挙げられる。「何が問題なのか」を明確にしていくことで、提案内容もより洗練されてくるのではないかと考える。企画書の作成を早い段階から進められるようにしておくことや先行研究、企業の取組について調べたり、実際に話を聞いたり、現地に行ってみたりすることができるようにしていくことが必要だと考える。

<参考文献>

- 中央教育審議会（2024）『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）』．
- 群馬県教育委員会（2024）『群馬県教育ビジョン（群馬県第4期教育振興基本計画）』．
- 群馬県教育委員会（2024）『エージェンシーを発揮するための学びを推進するリーフレット』．
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説（総則編・理科編・道徳編・総合的な学習の時間編）』，東山書房．
- 文部科学省（2023）『教育振興基本計画』．
- 御手洗明・赤塚祐哉・井上志音（2023）『国際バカロレア教育に学ぶ授業改善』，北大路書房．
- 中山芳一（2023）『教師のための「非認知能力」の育て方』，明治図書出版．
- 奈須正裕（2023）『コンピテンシー・ベースの教育と教科内容研究への期待』，日本教科内容学会誌，第9巻，第1号．
- OECD（2019）『OECD Learning Compass Concept Notes』．
- 白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』，ミネルヴァ書房．
- 白井俊（2025）『世界の教育はどこに向かうのか』，中公新書．
- 群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』．
- 群馬県教育委員会（2022）『ぐんまのSTEAM教育』．
- 群馬県教育委員会（2022）『総合的な学習の時間で児童生徒も教師も楽しく探究！』．
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領 総則』．
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』．
- 文部科学省（2022）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』．
- 中野真志・加藤智（2023）『資質・能力時代の総合的な学習の時間 知性と社会性と情動のパースペクティブ』，三恵社．
- 田村学・齋藤博伸監修、日本生活科・総合的学習教育学会第32回全国大会・神奈川大会実行委員会編著（2023）『探究的な学びを実現する「生活・総合」の新しい授業づくり』，小学館．
- 全米科学・工学・医学アカデミー編、秋田喜代美・一柳智紀・坂本篤史監訳（2024）『人はいかに学ぶのかー授業を変える学習科学の新たな挑戦』，北大路書房．